

詩の語彙

山本

三吉

詩とはどんなものか

詩は一つの感動を言葉によつて現はすものとす。

それは演説することでも、説明することでも、語りかけ

ことでもありません。

それを讀んだ人の心の中には自分かうけると同じ感動を

起させようといふ言葉とえうが、切つたり組み合せたり

しなから作るものです。

普通の文章が、ある場所からある場所まで一つの

目的をたつて歩いてゆくこととすれば、詩は同じまうの足

を動かしながらも同じ場所で行う舞踊やよう右の

なといわれたいよういふ。一つのことから説明するやうで

はるくて、讀んだり聞いたりする人の心全体に感じさせる

ことなすです。

なから文章のうすつても大変むづかしいやうにみえて、実は

一番とうつまやすく、誰んでも作れりやうなといふことか出来

ます。なせなら、~~感~~感じな一つの事柄を相手の説明

して理解せよをめんは、それを一応頭で整理し、順序

よく、正しく語らねばなりません。

純つし物なちが一つのことを感じるのは、理窟でなしに

心かかるといふ全体で感じるのである。それを



どこまでも自分のための。自分がはつらつと思つていくな  
生々しいものでなければ、詩のよこになりません。

詩というとはよく<sup>(清)</sup>空の雲や、花のような女性や、手ぬい  
ことをきれいな言葉で飾つて書くというおれと思  
つていふ人がありますが、それはまちがりで、いさゝか美  
しうなることはと並べてみれば、それは自分の感動から  
出ているのがないかぎり、決してよい詩にはなりません。

美や意実にはつくりものではないが、すかすから、自分が  
本当に感じとつたなら、夏に、破れた靴の中にも、溝泥  
の底にも、それはあまじい。それは何か、詩にすればこ  
とが出来まはわけです。

人々の間で、自分の無いきくした感じ、~~か~~一番  
大切だということになると、一つのバラの花を詩に書く場合でも  
歌工が、金持のお嬢さんのように書くわけにはゆかぬし、  
労働者の社長のよくなる感で、~~作~~作子わけにもゆかませぬ。

詩をつくよんたすれぐの毎日の生活から、<sup>(まづ自分の中に持たれている)</sup>感情、  
即ち生活感情が、詩として鳴り出すための唯一の要素と  
なるのである。

そしてその生活している感情、~~か~~自分の苦しみや  
よろこびが、外界の山や川や、機関車の動きや  
子供がころんだというように、採々の事物や出ま事  
と合する何か感動的であつた時、はいめん

「いまま」した。人の心でいる。自命の。依りごとで  
ない。当然の。ものが。生れ。み。が。す。し。、  
それこそが。直の。意味。が。う。つ。美。が。あり。『直の直』  
であり。又。それ。を。現。は。し。て。こ。え。詩。と。して。人。の。心。を。打。つ。こ。と。が。あ。り。ま。す。  
わけ。が。す。

3. どう書くかということ

書き方、方法というものは、そこではいじめた考へ  
られ。よ。う。い。な。り。ま。す。、  
その。感。動。を。も。つ。と。も。あ。り。の  
ま。に。、  
より。ほ。ん。と。う。に。近。く。表。現。す。る。の。は。ど。う。し。た。ら  
よ。い。か。、  
と。う。と。こ。ろ。で、  
書き方の。問題。が。起。つ。て。ま。ま。す。  
詩。は。短。歌。や。俳。句。の。よ。う。に。外。か。ら。き。め。ら。れ。た。形。式  
は。あ。り。ま。せ。ん。、  
どこ。ま。で。も。それ。を。ど。う。書。い。た。ら。一。番。その  
感。じ。の。あ。り。ま。す。か。、  
と。う。と。こ。ろ。で。け。て。す。

だからよくいわれるように「素直に」感。じ。な。ま。ま。と。直。に  
書。く。し。と。う。と。こ。ろ。が。最。も。大。切。で。あ。り。、  
それ。の。常。の。基。本  
に。な。り。ま。す。

子。塔。は。文。法。と。か。、~~排~~配。と。か。、  
観。念。と。か。、  
い。ろ。ぬ。れ。の。か  
ら。い。の。が。卒。直。に。感。じ。な。ま。ま。と。書。き。ま。す。、  
今日。は。あ。り。い  
お。天。氣。が。ど。い。ま。す。し。と。は。い。わ。ず、  
「い。い。あ。て。ん。ま。ね。お。は。ち。や。ん  
と。い。い。ま。す。、  
「鬼。の。耳。は。長。い」と。い。わ。ず、  
「う。さ。ぎ。の。み。み。は  
あ。め。い」と。い。い。ま。す。  
た。か。ら。や。う。感。じ。の。最。も。よ。く。あ。ら。わ。い。る。詩。に。な。り。ま。す。

大人の場合にはなか／＼そのようにゆきません

だから子供は自然に書かせれば感じたままがゆらせゝ  
のすか、大人の自然に書くとなか／＼感じたままは  
ゆつてまません、だから「素直に正直に」感じたままを  
といふは決し<sup>自然に</sup>づからめ<sup>自然に</sup>の書き流暢しさをすれば  
いひがたいといふことはなうちいひがす。

自分うの感知や心境を<sup>そのまま</sup>人になつとくさせよため、又は  
最も適確な表現して自分も満足するためには、<sup>ゆれ</sup>  
意味でゆれがなければなしに、言葉の緩急や調子や  
舌ざりや、かたちや、色々な面で、それと同じ感知を  
ゆれと<sup>ゆれ</sup>感じたり<sup>ゆれ</sup>なりして生じさせ得るよりの考へて  
ゆれをゆれば、感じたまましか出てこないうです。

だから詩というものは一番親しみ易く、誰でも作れるもので  
ありながら又古今東西の多くの詩人たちが<sup>いろいろ苦悶</sup>  
をしてまをゆけです。  
<sup>いひ</sup>詩をかこちめ

#### 4. 詩と物とちとの関係

詩はこゝろよりの自分うの生活と密接な関係をもつてい  
ます。良い詩を作ろうとするよと自分うの感じに耳を澄  
まさねばなりません、ゆつしてゆつ感じを表現すると  
自分うの生活がゆつにはつまり現はゆつてまます。

かゝる生活とゆつといふとだうけた調子の詩になり  
緊張しなふ持のつはひと張る詩がゆつてまます。

賤い人から賤い詩か、  
 卑い感情から卑い詩か  
 生れます。だから詩を藝の上で  
 高い実を追求して  
 いふ人は、  
 遠い実の生み方をしな  
 ければなりません  
 ところで「詩」とは「  
 いふの生みか」とい  
 うことだといわれま  
 け  
 ます。

だからたとえ自分の  
 悪い人間であつても  
 成るよれをばつかり  
 みる。自然のよれを  
 更に向うせよ  
 うとする。努力が起  
 るまます。即ち眞剣  
 な生活  
 かもたうてまます。  
 自分も立派な人の  
 生涯はよのまゝ詩だ  
 といえてまます。

（大きい意味で）

3222222

又いい詩を作らうと  
 する。自然や社会を  
 よく見よう。社会の  
 矛盾や自分の生活と  
 の関係をばつかりつ  
 かむようになります。  
 しゃあ妥協は許さな  
 くなります。人が詩  
 を作るのと同じに  
 詩を作る人が導かれ  
 るようになります。こ  
 れは詩だけではな  
 かく芸術というもの  
 はすべてその作用が  
 あります。詩は理窟  
 ではない。感じによ  
 り人間全体に力かけ  
 るもの。強いし、又  
 力かけます。社会的  
 な責任を伴うものと  
 します。詩を作る時  
 は自分を、自分の生  
 活を、よりよく、よ  
 り正しくさせよう。

力の中が起るくる感  
 動に、社会に對する  
 正しい良心や悲哀と  
 切り離すことの  
 必要ぬれのです。

今、詩人たちの作品の中では、戦争に向かっている日々の  
 動きをおさすものばかりや、歡喜をうたうものや、大部分  
 を占めていますか、これは詩人たちの政治意識からうた  
 へたものでなく、詩というものの本質から出たところの自然の  
 叫びなのですよ。

昔のバイロンの如く、現代のアラゴンの如く多くうすくは  
 詩人たちは書くことと同時に一身を捨てる行動を起して  
 戦死した時代には

社会の不正や、虐げられた人々を救うための戦いでした。  
 すくはれた詩はこのような純粋な、人間愛の溢れた精神から  
 咲き出さるものなせう。

現在のような人々の原子戦争の破滅の突入するお  
 うかの、日本が国民の生活を放棄して再び火の雨を浴びるお  
 うか、という岐路に立たされていよ時代は、於ては、いまお  
 自分の生活の上で、堪えられぬ平和をぬかうし、怒りの上に  
 起り消えよさまでその感情が、すくはれた詩を生み出すせ  
 う、最大の母胎になよせうし、美しき心を持つ詩人の  
 上の於ては、<sup>そのような生きかたが</sup>主位を占めよことになよせう。